
ブルー・マリーヌの勝利

長部重康 (法政大学名誉教授)

はじめに

5年振りの欧州議会選挙が2014年5月末におこなわれ、投票率は前回の2009年と同様、43%の最低値を更新した。2008年の金融危機以降、EUへの欧州市民の関心低下が続いている。これを逆手にとって、左右を問わぬ欧州懐疑派 (Euroceptics) や急進ポピュリスト政党が反EU、反移民、反イスラムを叫んで躍進した。総議席571のうち、ポピュリスト政党はこれまでの2割から3割へと急増した。

とりわけ極右・右翼ポピュリストの議席数躍進が顕著となって1割を占め、ヨーロッパに不安が広がった。英、仏2大国で突出しており、イギリスでは英独立党 (UKIP: United Kingdom Independent Party) が得票率27.5%で第1党に躍り出て、議席数を13から24へ倍増させた。労働党が2位で25.4%、与党の保守党に至っては23.9%と3位の屈辱を味わった。フランスでもフロンナショナル (FN、国民戦線) が25.0%でトップに立ち、議席数は3から24へと脅威の8倍増を果たした。イギリスと同様に、野党UMP (民衆運動連合) が20.8%でFNを追い、与党社会党は14.0%と惨敗した。『ファイナンシャル・タイムズ』は、「主流政党が指導力を欠いた例は、ヨーロッパで他にない」と酷評し、フランス政治に疑問符を突きつけた¹。

ヨーロッパ全体の極右、ナショナル・ポピュリズムの現状分析については別稿に譲り²、また社会党とUMPをめぐるフランス主流派政治の追跡は他日に期すとし、以下にマリニストFNの躍進、「ブルー・マリーヌの勝利」の要因を探ってみよう。

第1節 市町村議会、欧州議会、上院、県議会選挙で左派は4連敗

1) 市町村議会選挙

2014年には3月に市町村議会選挙、5月に欧州議会選挙、そして9月に上院選挙、あけて2015年3月に県議会選挙と、立て続けに4回の選挙が行われ、オランド大統領の与党、社会党は連敗した。

まず2014年3月末に、約3万7千のコミューン (基礎自治体) で議会選挙がおこなわれ、その結果を受けて首長 (maire) が決まる (図表1)。フランスのコミューンは人口が数名の極端に小さな集落から、パリやマルセーユのような200万人都市にいたるまで、規模の格差が大きい。同等権限の建前だが、便宜上、市町村と邦訳される。選挙は6年ごとで、人口規模により投票方法は多少異なるものの、2回投票制では変わらない。第1回投票の結果が政治傾向をより明確に示すが、今回は極右を除く中道右派勢力が46.38%を得て第1党になり、極左を除く与党社会党中心の議会主義左派は38.20%と大敗した。極右は4.88%、極左は0.60%であった。

第2回投票の結果は、右派對左派が45.65%対41.56%、極右6.87%、極左0.05%となった。人口1万人以上の都市では、中道右派の制した都市はこれまでの433から、139増えて572都市となった。うち人口10万人以上の大都市では、12から22へと倍増に近かった。右派はマルセーユ、ボルドー、ニース、ナンシー、オルレアンなどをひき続き確保した上に、新たに10都市を獲得した。左派は前回2008年に大勝を挙げており、1万人以上の都市509市を獲得し、UMPからストラスブル、ツールーズ、アミアン、ランス、サンテチエンヌを奪っていた。だが今回は、左派が得た都市数は349へと急減し、大都市も29から19へと大きく減らした。伝統的に左翼の強いパリ、リヨンは引き続き確保して、ストラスブルも僅差ながらも保持し得た。だが4都市がUMPに奪い返され、加えてリームーザン、トゥール、グルノーブルが新たにUMPへ、モンペリエが左系諸派へ渡った。左翼の牙城都市、10以上を失うことになったが、この歴史的な社会党の惨状は「ベレジナの敗北」とまで呼ばれる。ナポレオン大軍団がモスクワ撤退の際に、この河の戦いで潰走した故事に由来する³。

図表1 市町村議会選挙第2回の結果（2008～14年）

党 派	2008年第2回		2014年第2回	
	得票率	議席数	投票率	議席数
右派（多数派）連合*	26.5%	19465	19.7%	11334
UMP*			7.2%	11151
議会主義右派合計			45.7%	105840
左翼連合**	23.5%	17590	21.9%	12923
社会党	9.8%	10457	5.8%	12278
FN	0.3%	63	6.8%	1498
議会主義左派合計			41.6%	72624

*2008年には多数派連合（UMP、中道のNCと一部のMoDem、PS離党者）で登録。

**左翼連合は社会党、共産党、緑の党。

出典：Élection municipale 2008, 2014, in Wikipédia français

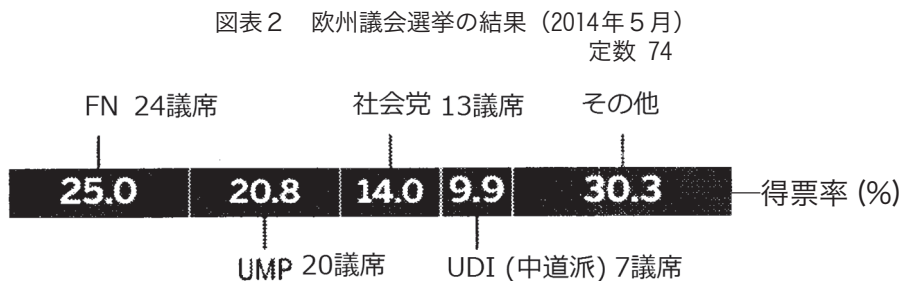
FNは1995年以来の歴史的勝利を取めた。第2回投票で得票数6.75%、議席数1500近くを獲得できたが、前回はわずか63議席に過ぎなかった。自治体首長も今回は11（極右合計では14）に達した。うち北部フランスに位置し斜陽産業を抱えた「ポスト産業」地域のある都市では、決戦を待たず第1回投票で勝利した。とはいえFNがUMPを追い詰めたとまではいえず、社会党崩壊・右派伸長という全般的傾向の反映に留まる。かつて1995年や97年の地方選挙においてFNが1200議席を獲得し、4自治体の首長を手に入れた歴史がある。その際走った巨大な衝撃と比べれば、今回はさほどでもない⁴。それゆえFNの「歴史的躍進」への驚愕は、5月の欧州議会選挙まで持ち越されることになった。今回は、右派・極右間の強固な壁が崩れた事実に注目が集まった。リモージュではFN支持層が、決戦でUMPの右派候補に流れたのである。他方、北仏のノール・パドカレ地域圏にある「ポスト産業」の諸都市は、戦後一貫して左翼の伝統的地盤であり続けたが、すでに10年以上も前から労働者の極右支持への乗り換えが始まり、今回はそれが雪崩を打って拡大した。

2014年3月31日付け『パリジャン』の調査では、回答者の6割近くがFNを主流派政党とみなすべきと考えるが、他方で、首長や地方議員へのFNの進出は「行き過ぎでよくない」が62%に上った。有権者の戸惑いが露呈される⁵。

2) 欧州議会選挙

2014年5月末におこなわれた欧州議会選挙の結果(図表2)が明らかになると、フランス政治は3重のショックに襲われた⁶。第5共和政下の選挙は小選挙区2回投票制が基本だが、例外的に欧州議会選挙と地方圏(州)議会選挙とは比例制でおこなわれ、民意が直接結果に反映される。

ショックの第1は、FNが他の主流派政党を押しつけて第1党に躍り出た事実である。得票率は前回6.3%の4倍増で25%、議席数は8倍増の24になった。46歳の若き女性党首マリーヌ・ルペン、北仏のノールウエスト選挙区(ノルマンディー、パドカレ、ピカルディー地方)で33.6%もの大量票をかき集め、「人々が声を挙げた」と叫んだ。1972年の創設以来、40余年の間、弱小抵抗政党に甘んじてきたFNが突如脱皮して、政権政党へと飛躍した瞬間であった。



第2に、与党の社会党は前回の16.5%より票を減らして14.0%の大敗を喫し、第3位に沈んだ。オランダ大統領は「悲惨な結果」と悲嘆にくれ、先の市町村議会選挙の大敗後、無能なエラーに替わった若き野心家の新首相ヴァルスは「地震だ」と唇を噛んだ。

第3に、ゴースト・中道右派のUMPは、前回の28%から大きく票を減らして20.8%に落ち込み、初めてFNの後塵を拝した。市町村議会選挙で挙げた好成績もこれで帳消しになる。开票の2日後、党首コペは2012年大統領選挙の資金疑惑から辞任に追い込まれ、7月にはサルコジが政治資金捜査への介入疑惑で、大統領経験者として史上初の、身柄拘束の屈辱を味わされた。

3) 上院議会選挙

2014年9月には上院議員選挙が行われ、左派支配が覆った。定員348名で任期6年、3年ごとに半数改選されるが、各級地方議員と市長、国民議会議員、上院議員による間接選挙である。選挙人の95%が市町村の首長で占められ、先の市町村議会選挙の結果が大きく響く。前回2011年の選挙では、左派(社、共、緑)が177名を抑えて過半数プラス6と、僅差ながら戦後初の左派による上院制覇が成った。だが今回は、左派が25議席減で152(社会党112、共産党系18、急進左派12、緑10など)に減少し、20議席増で187(UMP143、中道43、急進左派1)になった中道右派に逆転さ

れた。わずか3年にして戦後の伝統が甦り、上下両院はねじれ現象をきたしたオランダの政権運営は一層困難になる。

今回の注目点は、FNが史上初の上院議員2名を誕生させた事実にある。地中海に面したFNの牙城、マルセユ第7区の区長とそれに隣接するフレジュ（Féjus）市長との2議員の選出だが、会派は組めず無所属となった。他にベルギー国境に近い北部6県では、議席獲得は成らなかったものの、FNの地方議員以外からも予想外に多くの支持票が集まった。その第1の理由は、党首マリーヌ・ルペンがその北に位置するノール・パドカレ地域圏（州）議員を務めている事情から、「ポスト産業」地域の労働者がFN支持の中核を成しているためである。第2に、社会党政権が目指す地方自治制度の改革に遭遇したことである。地域圏を中心に大幅な改変が進められるため、農村部の地方議員は不安を高め、政権批判を噴出させた。かつて2011年の上院選挙の際にも、地方自治改革を目指した保守による「バラデュール改革」への反発からUMPが敗北したが、今回は社会党政権批判として再燃した。地方議員は党派を超えて、改革反対のFNに向かった⁷。

2012年の総選挙で、FNは国民議会へも20年振りの快挙として2議員を送り込んだ。今回、2名の上院議員が誕生して、市町村議会、県議会、地方圏（州）議会、上下両院、欧州議会と、すべての審級での議会進出を果たしたことになる。幹事長は「FNが希望と革新のシンボルとして、国民から認められた証左だ」とコメントした。

4) 県会議員選挙

2015年3月末に98県2054選挙区（各区定員2名で総数4108名）で県会議員選挙（小選挙区2回投票制）がおこなわれ、社会党大敗とUMP（国民運動連合）の圧勝、そしてFNの伸び悩みが明らかとなった。今回は大幅な制度改定となり、これまでの3年ごとの半数改選が6年ごとの一斉改選に替わり、とりわけ世界初のパリテ条項（各選挙区で男女1組の当選）が導入された⁸。

第1回は、UMP・中道派が得票率の29%、FNが25%、社会党は22%となり、UMPの復調が明らかになった。FNが30%でトップに立つ、との事前予測は外れたものの、4割超えの43県で首位に立った。

第2回は、中道右派の大幅な伸びと、FNの減退傾向とが一層進んだ。中道右派は37.6%と圧勝して首長たる県会議長獲得数を41から67に拡大させて、全体の3分の2を抑えた。この歴史的快挙でサルコジUMP総裁は、大統領候補の座を確実にした。FNは善戦し県議員数を1から62名に拡大させたものの、第1回での支持票の中道右派への移動と、労働者層での棄権拡大とで、支持率は22.2%の3位に下がり伸び悩みがはっきりした。2017年の大統領選挙への見通しは、2015年12月の地方圏議会選挙の結果待ちとなる。

社会党は、FNの停滞のおかげで25.5%の第2位に浮上できたものの、獲得県会議長数は48からほぼ半減して26になり、左派全体でも57から30へ急減した。大統領と首相との地盤を含む26県を中道右派へ、1県を諸派に明け渡した。オランダ大統領は、1月の連続テロ事件の直後、果敢な反テロ姿勢が好感されて、史上初の13%まで陥落した支持率を40%に急回復させていた。だが経済の停滞、失業率の高止まり、治安の悪化は止まらず、国民から復讐されて再選の芽は摘まれた。と

りわけ矢継ぎ早なビジネス・フレンドリーへの政策転換が党内左派の不満分子を跋扈させ、緑や左翼党との連携を挫折させた。他方でFNが賃上げや年金引き上げなど、社会政策に力を入れて社会党との競合色を強め、ノール県などで左翼取り込みに成功した。こうして社会党は引き裂かれる。

第2節 躍進するFN

1) マリーヌの圧勝

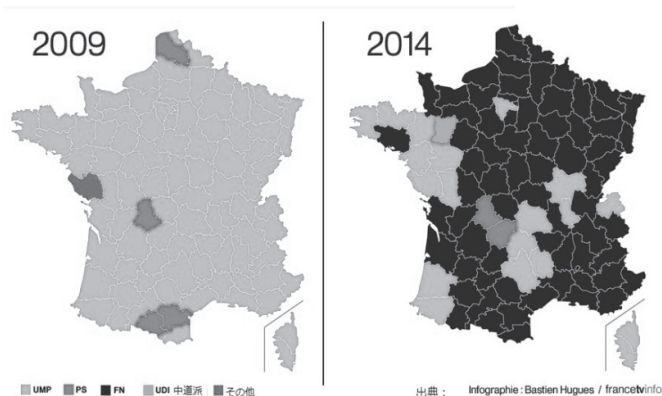
2014年5月末の欧州議会選挙で、フロンナショナル（FN）は圧勝した。党首マリーヌ・ルペンはテレビカメラの前で、「アメリカとの自由貿易協定と闘い、EUへの主権移譲と闘い、独首相メルケル主導でEUが押付けてくるさらなる緊縮策と闘う」と宣言し、「われわれがフランスを守る」と胸を張った。FNは得票率25%を抑えてトップを占め、1972年の結党以来最大の歴史的勝利を挙げた。直接民意が反映される比例制選挙の結果とはいえ、市町村議会選挙後わずか2月にして、FN支持に弾みがついた。

FNは長い間、アルジェリア帰還のピエノワール（白人入植者）が多く住む、地中海に面したメディ（南部）と、ベルギー国境に隣接し、その後繊維・石炭・製鉄産業の斜陽化がすすんだ「ポスト産業」地域のノール・パドカレとに、強固な地盤を築きあげてきた。今回はこのFNの伝統的2大牙城を大きく超えて、本土96県の選挙区中、カトリックの強い西部と、メディアが影響力をもつイルドフランス（パリ首都圏）とを除く71県でトップ当選を果たした（図表3）。UMPが首位を占めた選挙区は22にとどまり、与党社会党に至ってはわずか2県の惨状をさらした、オランダの地元のコレーズ県と、それに隣接してCGTや共産党の強い、リモージュ焼きで有名なオートヴィエンヌ県とである。

驚嘆すべきはFNが、35歳以下の青年層と35～39歳の中年層との間で最人気の政党に躍り出て、それぞれ30%と27%を占めたことである。2位以下は青年層で社会党とUMPとが15%ずつ、中年層ではUMPが18%、社会党が12%となった。またかつての共産党のように労働者階級の間で、またホワイトカラー層においても最大支持を獲得し、それぞれ43%と38%に達した。2位以下は前者でUMP17%、左翼戦線と社会党とが8%ずつ、後者では社会党16%、UMP12%となった⁹。5年にわたる金融危機とユーロ危機とに翻弄されて、市民は雇用喪失、工場閉鎖、傷ついた国家プライド、そして果たされない政治約束に対し怒りをたぎらせる。FNはこの怒りの受け皿になれた。別の調査でも、失業率が22.4%（2011年末）に膨れ上がった18～24歳の若者層で、FNが支持率26%で第1党になり社会党の25%（2011年末に29%）を上回った。同時に左翼党や共産党などが結集したより急進的な左翼戦線も、5から16%に急騰した¹⁰。

5月1日はメーデーである。その向こうを張って毎年FNは、パリでジャンヌ・ダルク祭を開く。党員や支持者がオペラ広場に集まり、党幹部を先頭に「愛国行進」を開始してオペラ通りを練り歩き、ピラミッド広場まで至る。マリーヌが党首になってからは、スキンヘッドの参加は禁じられた。党首は、黄金に輝くジャンヌ・ダルク像の前にしつらえられた演壇に登り、マイクを握る。市町村議会選挙の勝利を受けた2014年の祭典では、マリーヌ・ルペンは「われわれは思想戦に勝利した。今後このイデオロギーの勝利を、政治的勝利に転化しなければならない」と宣言した。その

図表3 欧州議会選挙結果—県選挙区別トップ当選政党



後、欧州議会選挙で大勝するや、彼女は現有2議席にとどまる国民議会の解散を要求した¹¹。いまや傷ついた少数者の代表に転落した国民議会だが、いやしくも「国民」の代表を名乗るなら、解散・総選挙による出直しは当然だ、と声を上げたのだ¹²。第5共和制下に総選挙は小選挙区2回投票制でおこなわれるが、1986年に一度だけ比例制で行われた。国有化と計画化の「実験」で失敗したミッテランが、保守・中道間の選挙取引を不可能にして、敗北を最小限に抑えようと狙ったためだが、FNは得票率9.7%を挙げて35名もの代議士を送りこんだ。これが第1次「ルペン・ショック」である。

総選挙後コアビタシオン（保革共存）となり、首相の座を奪ったシラクが直ちに2回投票制に戻した。1988年にはミッテランが奇跡の大統領再選を果たすが、FNはその直後の総選挙でわずか1名当選の悲哀に泣いた¹³。さらに1993年以降は議席ゼロとなり、2012年までの20年の間、国民議会から締め出されてしまった。もし今回、国民議会が解散されて比例制投票に替われば、FNは得票率25%で150議席以上の大勝を挙げられる¹⁴。

2002年の大統領選挙では16名もの候補が乱立し、票が分散した。父のジャンマリー・ルペンは第1回で16.9%をとり、16.2%の社会党ジョスパンを僅差で引きずり落としてシラクとの決戦に臨んだ。第2次「ルペン・ショック」が世界に走ったが、ルペン自身を含め、だれ一人これを政治ショー以上のものとみなさなかつた。2012年の大統領選挙で初の立候補を果たした娘のマリーヌは、決勝進出はならなかつたものの17.9%を挙げて父親の成績を超えた。選挙戦では彼女は12の優先政策を訴えたが、うち3つが共和派のテーマに直接かかわる。①低賃金と年金との引上げによる共和政の社会的次元の強調、②強力な国家の実現、③世俗性の確保、がそれである¹⁵。極右分析の権威パスカル・ペリノ教授は「マリーヌ・ルペンは既成価値破壊的な父親よりずっと主流派政党に近づき、共和政と国家の中核に位置する立憲的価値と世俗性を強調する。国家や伝統擁護に忠実な、現代的政治家のイメージを広げようと努めている」とみる¹⁶。2017年に迎える大統領選挙では、マリーヌは本気で勝ちを取りに行く構えである。2015年12月に地域圏（州）議会選挙が迫るが、比例制ゆえに27の選挙区中「半数制覇を果たす」と公言している。この余勢を駆って翌年5

月の大統領選挙に臨み、「第1回でトップ当選を果たし、決戦へ進む」と息巻く。父親譲りの大言壮語癖と切り捨てることは容易だが、可能性がゼロとは言いきれない。

2) ブルー・マリーヌ連合の旗の下に

彼女の本気度は、「論理的には選挙前に、FNの総裁を辞任する¹⁷」と語ったことで伝わってくる。2007年の大統領選挙に際してはFNを中心に、1999年FN脱党の元ナンバーツー、ブルノ・メグレが結成したMNR（共和派国民運動）など極右諸派が集まり、「愛国者同盟」（Union des patriotes）を結成する動きがあったが、失敗に終わった。マリーヌはこの機会を逃さず、2012年の総選挙で「ブルー・マリーヌ連合」（RBM: Rassemblement bleu Marine）¹⁸を立ち上げて戦った。中道右派からはドヴィリエ派とゴーリスト脱党組を、左からは社会党を飛び出した旧シュベヌマン派などを迎え入れた。伝統的な左右の裂け目を超えて、反欧州統合の「スプレニスト」（souverainistes、国家主権主義）諸派をFNのもとに糾合する連合体を組織したのである。ブルーは右派の色でありUMPが用いる。彼女は、「マリブルー色（緑がかった濃い青）の方がよりラジカルであり、それゆえ新党の名称表記ではマリーヌの方が重要な意味をもつ¹⁹」と力説し、マリーヌの名を売り込んでいる。RBMは定員577に迫る572名もの候補を全国に立てたが、うち50名がFN党員以外からの候補であった。このときFNが20年振りに2名の代議士を誕生させたが、1人は22歳で最年少の女性議員、姪のマリオン・マレシャル＝ルペンであり選挙区はプロヴァンス、もう1人はラングドック選出の弁護士であった。党首マリーヌは北仏パドカレから立候補して第1回では42.3%の驚異的な数字をたたき出し、トップに立ったものの、決戦では0.2%の僅差でUMPが消極的支持をした社会党候補に敗れ、涙を飲んだ。選管に提訴したが退けられた。

FNのRBMの旗の下での参戦には、党員の9割がショックを受け、父親も断固反対した。だがジャンマリー自身も、実は1988年の大統領選挙では決戦進出を夢見て、党名変更を考えた過去がある²⁰。マリーヌは2014年の市町村議会選挙でも「ブルー・マリーヌ連合」のラベルで、500名もの候補を立てている。だが有力幹部は、「RBMとは中身なしの牡蠣殻に過ぎない。FNによるFNとの連合にすぎず、脱皮を急ぐべきだ」とその実態を嘆いた²¹。

前大統領のサルコジは下馬評通り政界からの引退発言を翻して、2014年11月、UMPの党首選に出馬し勝利した。支持率は65%と振るわなかったものの、元首相のジュベヤフィヨンとの間で大統領候補の椅子を争うことになる。その彼が党首選のさなかに、UMPの改称を打ち上げた。ゴーリストはリーダーが変わるごとに改名を重ねてきて、今回実現すれば5度目になる。ゴーリスト党とは、大統領の個人的選挙マシンの色彩が濃厚だからである。昨2014年3月、エローに替り首相に抜擢されたヴァルスは、もともと社会党とは時代遅れの党名ゆえに左翼共和党などへ改名すべき、と主張してきた。党内左派からは警戒が広がる。期せずして主要3政党で改名への動きが噴出したが、偶然とは言えない。ユーロ危機を通じて政党と市民間の溝が深まり、姑息ながら、それを埋めるための象徴的な試みが党名変更といえるからである。

さてマリーヌは、FNという危険なラベルの一刻も早い放擲を願い、ニュールックの「ブルー・マリーヌ連合」への変身を急ぎたい。彼女は「自分はゴーリストではないが、ゴリアン（ドゴ

ル好き)だ」と明言しているが²²、RBMへの改称とは実のところドゴール戦略のパクリでしかない。ドゴールは、自ら右派の政治傾向を明示することは無かった。支える政治組織も、主義主張の実現を目指す「政党」(Parti)とは名乗らず、幅広い国民の「結集」(Rassemblement)ないし「連合」(Union)をめざした。ともに「連合」と邦訳されるが、RFP(フランス人民連合:1947~55)から始まり、UDR(共和国民主連合1968~76)、RPR(共和国連合1976~2002)、UMP(民衆運動連合2002~)と続く。ドゴールはジスタンスを指揮し、かろうじてフランスの戦勝国入りを果せたが、過去の栄光は大きく傷ついた。彼はその再生をめざし、戦後復興と第5共和政の樹立とに心血を注いだ。成功のカギは「国民の結集」にあり、共和政への国民の統合、一体化を促す必要がある、と自覚していた。それゆえドゴールはヴィシー時代の対独協力という汚辱の歴史を封印し、反革命と王政復古という反共和派の歴史には口を拭った。右派の伝統にも距離を置き、「ゴースムの神話」を紡ぎ出すべく「開かれた結集」を運動の中核に据えたのである²³。

マリーヌの「結集」とはこのドゴール戦略のコピーを狙ったものといえるが、実際はフランスの「分断」でしかない。ムスリムやアラブ人を標的に据えた「外国人嫌い」(xénophobe)をバネに、「生粋のフランス人」(Français de souche)、「真のフランス人」(vrais Français)、「フランスを愛するもの」を囲い込み、「似非フランス人」(faux Français)や「フランス嫌い」(francophobe)の排除に狂奔する。「閉ざされた結集」でしかない。「分断」の起源はかつてモーリス・バレスやシャルル・モーラスが用いた「真の国」(pay réel)と「擬制の国」(pay légal)との断絶、「深層のフランス」と「表層のフランス」切断に由来する。前者は地域、労働、職業、教区、家族など生活のリアリティーに根付くものだが、後者は共和制の諸制度を指す。前者のうえに人工的に重ねたものにすぎず、異なる実質を法的に同一視する、擬制でしかない。カトリックの政治的伝統に立つ、社会有機体説の反映でもある。モーラスによれば、擬制のフランスや似非フランス人とは、時間的には先住民から、空間的には外部からやってくる。彼は反英ではなかったものの、激しいドイツ嫌いであり、宗教改革、啓蒙主義、フランス革命を断罪し、外国人はもちろん、プロテスタント、ユダヤ人、フリーメイソンも「内なる外国人」と見做して、彼らに対する排外主義と外国人嫌いに走った²⁴。

ヨーロッパの極右政党は、間欠泉のように数か月間、あるいは数年の間激しく炎上すると、その後ばかりと勢いが衰え、あるいはひっそりと消えていく²⁵。極右が生き延びるには、時代の変わり目ごとに、ギリシャ神話に登場するデウス・エクソ・マキナ(機械仕立ての神)が、あるいは救世主(homme providentiel)が登場して窮地を脱する必要がある。2002年の大統領選第1回で、ジャン・マリー・ルベンは16.9%、480万票を掴んで決戦進出を果たした。だが5月1日のメーデーでは、全国で左右を問わぬ130万人もの市民がルベン引きずり下ろしに立ちあがり、「反極右・共和政擁護」の激しいデモを展開した。ルベンは決戦で75万票も積み増してきたものの、30%に迫るとみられた得票率はわずか17.8%に止まり、シラクが圧勝した。引き続く総選挙では得票率はさらに12.2%に急落し、FNの議席獲得はならなかった²⁶。当時選挙参謀を務め、後にマリーヌのパートナーとなるルイ・アリオは、「ルベンはファシストだ、奴をやっつけろ！」の巨大な民衆のうねりを前に、恐怖したと語っている²⁷。この共和派の復讐を境にFNは衰退へ向かい、2007年の大統領選挙と総

選挙との第1回投票では、得票率が10.4%、4.3%へと沈み、冬の時代に入った。ジャンマリー・ルペンは70歳を超えて引退が近づき、FNの命運もこれまでとみられた。反共和派の限界を思い知らされたマリーヌは、共和派入りによるFNの再建を誓い、やがてニュールックへの変身を急ぎ救いの女神として登場することになる。FNは不死鳥のように甦り、ヨーロッパにとってのヒドラ（九つの頭を持つ海蛇の怪物）たる、イスラム脅威の追い払いを約束するのである。

第3節 ニュールックの展開

1) 脱悪魔化戦略

欧州議会選挙における1972年の結党以来の大勝利を前に、FNの指導層、幹部、活動家、支持者はマリーヌ・ルペンに深く感謝する。彼女は2014年に46歳を迎えたが、85歳になる党創始者、ジャンマリー・ルペンの3女に生まれた。パリ大学法学部を出て弁護士になり、何年か不法移民者の権利獲得やエーズの血液汚染、政治腐敗事件などを担当して研鑽を積み、後にFNの法務部門を立ち上げた。2002年には父親の大統領選を取り仕切って初のメディアへの登場を果たし、2007年に父から後継指名を受けた。ジャンマリー・ルペンの長き戦友で、ラジカル・カトリックの極右、リヨン大学法学教授のブルノ・ゴルニッシュ（京都大学に留学し妻は日本人）が、これまで自他ともに後継者と目されてきた。だが2011年の党大会で、マリーヌは支持率68%を得て大差で彼を下し、総裁の座を引き継いだ。以後、絶対的権威を確立し、彼女が属した党青年部、「ルペン世代」の出身者で側近を固め、意志決定をほぼ独占することに成功した。9名よりなる執行部には、マリーヌ総裁と終身名誉総裁の父親、そして副総裁の一人に彼女の現在のパートナーを送り込んだ。最初の夫は企業家でFNと取引があり、2番目の夫は全国書記になっている。姉で二女のヤンは、党幹部のサムエル・マレシャルと離婚したが、その娘の一人が2012年に22歳の最年少代議士として当選した、マリオン・マレシャル＝ルペンである。他の家族も様々な形で党活動に関与し、FNは同族企業色が濃厚である。ケネディー家やガンディー家と同様、ルペン家も政治家系の名門入りを果たした²⁸。

彼女はしばしばマッチョ振りを発揮し、年上の幹部に向かって権威主義的で高飛車な物言いをする。他方で人間関係には細やかな配慮を忘れず、過ちをおかした党員を問い詰めることなく、口実を見出だそうと努める。無能な活動家でもすぐには首にしない。マリーヌはフランス救済を自己の使命と考え、ジャンヌ・ダルクに同化する。それは自己陶醉というより、冷静な計算からの作為とみられるが、ここから彼女の傲慢さが奔流を始める。「私の国民」が口癖になり、国民を自己の所有物視する。父親とは違い、極右文化との直接のかかわりは薄く、シャルル・モーラスもよく知らない。先輩たちの抱く失われた大義への復讐については、意識を共有できず、植民地への喪失感も持たない。いずれも長い間、極右の伝統的シンボルであり続けてきたテーマだが、彼女には何の感慨もない。かつて党首と党員とは、外の世界から「除け者」や「ナチス」と「蔑まれてきた感情」をバネに、固い絆で結ばれていたが、それも今では消えてしまった。かつて彼女の支持者であった一人は、「マリーヌは我々のコード、記号体系をなにも知らない」と切り捨てる²⁹。

これまでFNは幻滅、拒否、不安をテコに拡大を続け、体制への抗議や糾弾の手段として棄権率

の増大や代議制民主主義の告発などを最大限利用してきた。だがこの「否定の政治化」(politisation négative)からの脱皮に、「永遠の否認」という軛からの開放に成功できない限り、たんなる対抗勢力に終り、多数派権力への接近は不可能である³⁰。FNは1998年にローヌ・アルプなど4地域圏議会選挙で、中道派の旧UDFからの議長（首長）誕生に手を貸した過去がある。このときシラク大統領は、FNの「人種差別と外国人嫌いの本性」を攻撃し、ルペンを「良心の声より政治ゲームを優先させる政治屋」だと糾弾し³¹、彼との会見は一切拒否した。

マージナルな極右政党が既成政党との溝を乗り越え、有権者の支持を広げていくのは容易ではない。そのために彼女が選んだ切り札とは、「脱悪魔化戦略」(stratégie de dédialisation)、あるいは「正常化戦略」(stratégie de normalisation)と呼ばれるものである。1978年にジャンマリー・ルペンは「ナチのガス室は歴史の細部にすぎぬ」と発言し、「尊敬を求めぬ危険な政治家」として世論の袋叩きにあった³²。プルトン生まれで猥雑なケルトの血を引く彼は、もともと戦闘的であり、危ない表現を意図的に駆使する。傍流ながらも、反エリート、反エスタブリッシュメントを標榜する言葉の軽業師、曲芸師として、庶民層から抜群の人気を博してきた。

彼のなかには「悪い悪魔化」と「良い悪魔化」とが混在する。ガス室の否定など反ユダヤ主義の主張は「悪い悪魔化」であり、現在のイギリスのUKIPや、2013年までのオランダ自由党がFNとの共闘を拒否する理由となった。「良い悪魔化」とは、エスタブリッシュメント糾弾、脅威への警告、侵略への防衛、歴史の敗者復活などの言説にあり、「反体制」のレッテルといえる。マリーヌは父親が党を悪い悪魔化に引きずり込むことなく、良い悪魔化の火は灯し続けて欲しいと願う。だがジャンマリー・ルペンの暴発は止まらず、先の欧州議会選挙後も、ユダヤ系歌手のFN批判を標的に、「今度は窯焼きにしてやる」との暴言を吐き、マリーヌや党幹部から公的に叱責を浴びた³³。

FN党内で脱悪魔化戦略、あるいは正常化戦略を展開したのは、マリーヌが最初というわけではない。かつてジャンマリーに次ぐFNのナンバーツーを務めた党のリーダーたちは、いずれも「尊敬化作戦」(stratégie de respectabilisation)を模索してきた³⁴。党の急進化がいき過ぎると穏健派や中産階級の離反が始まり、これに歯止めを掛ける必要がある。政権獲得を視野に入れば、ゴーリトのRPR（共和国連合）やRPF（フランス連合）との連携も模索せざるをえない。1970年代後半にはデュブラが、80年代にはスティルボワが、そして90年代にはメグレが、それぞれ「尊敬化作戦」を指揮した³⁵。ガス室発言があった1987年まではジャンマリー・ルペン自身も、党改革は口にしないまでも、UDF（中道）やRPR（ゴーリスト）との連携への期待を語ることはあった。だがその後シラクからの度重なる会見拒否という屈辱を浴せられて復讐を誓う。バラデュールとサルコジとの会見が叶ったが、彼はそれへの謝辞を語っている³⁶。

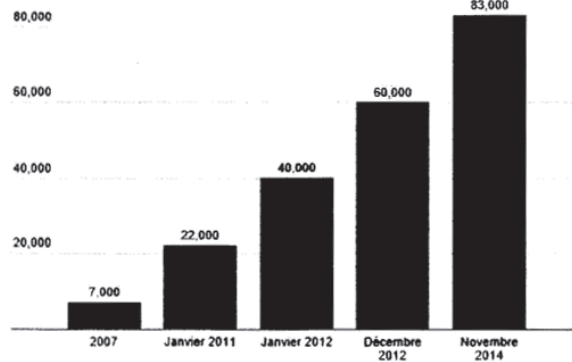
ともあれルペンは尊敬は求めず、危険視されるのを愉しみ、反抗のアジテーターを続ける決断をした。この結果、かえって反システム、反エリート票の独占が可能になったといえる。ジャンマリーは、歴代のFNナンバーツーによる脱悪魔化の努力には、終始、無視を貫き、やがては激しい反発に転じた。秀才校のポリテクニク（理工科学校）卒業で、高級官僚出身のエリートたるブルノ・メグレは、理論武装に長けた「近代化論者」(moderniste)であり、1990年以降、代表委員として党をリードした。以後、「権力掌握と多数派形成」をターゲットに、組織的かつ緻密な脱悪魔

化戦略の展開を急いだ。ジャンマリーは、総裁の座を奪われる脅威を感じ、1999年にはメグレ放逐に走った。娘のマリーヌも先頭に立ってメグレ派弾圧を指揮し、「大型客船（ナンテールにあった旧党本部棟のあだ名）の女帝」、「大型客船の女警官」と揶揄された³⁷。そのマリーヌが今や、脱悪魔化でメグレ戦略の再接収を先導している。だが両者の戦略は、ゴースト、中道右派との連携をめぐる大きく分岐する。メグレは「尊敬化」を右派連携の切り札にしようと狙い、シラクから無視された。だがマリーヌは連携をきっぱりあきらめ、FN自らが共和派主要政党へのし上がるべく「脱悪魔化」を急ぎ、左右両翼にウイングを広げて政権獲得を目指すのである。

現在党副総裁でマリーヌのパートナー、当時は書記長のルイ・アリオが、2005年以降、脱悪魔化の指揮をとってきた。ツールーズ大学の憲法、公法学の講師を務めたのち、弁護士資格も得た。彼は過激派の烙印を押し、危険勢力を次々に排除し、とりわけ「シオニスト・グループ」のページに走り、活動家から「粛清のスピッツ」と恐れられる。最大のターゲットがアンチセミティズム（反ユダヤ主義）の一掃であり、西欧で進展するネオ・ナショナル・ポピュリズムの新傾向³⁸への合流を意図したものといえる。それに代わる新たなアイデンティティーとして、外国人嫌いの過激な反イスラム版をオランダから輸入した。「オランダのイスラム化」に対決する十字軍を呼びかけたピム・フォルトアインが、2002年の総選挙直前に、親イスラムの若者により射殺された。ピム・フォルトアイン党は引合戦に勝利して連立政権入りを果たしたが、閣内対立の激化から結局は100日天下に終わった。その4年後2006年に、ヘルト・ヴィルダースが自由党を立ち上げた。彼は極め付きの親イスラエルであり、イスラムこそが西欧乗っ取りを狙う攻撃的イデオロギーであり、新たなファシズムの誕生だと糾弾する。その過激な言動から、イギリスの入国禁止を食らったほどである³⁹。マリーヌは父のガス室発言は認めず、歴史レビジョニズム（ガス室の存在を否定）にも反発し、ファシズム非難を強める⁴⁰。それに代わる新たなイデオロギーの根拠地を必要とし、それを反イスラムに見出したのである。

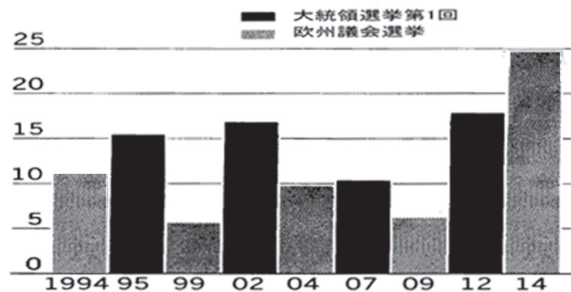
ともあれ2007年以降古典派極右からマリニストへの、FNの変身が進み、党勢拡大には目覚ましいものがある。黨員数は2007年の7000人から2014年に8.3万人へと12倍に急増し（図表4）、UMPの26.8万人、社会党の10万人に迫る勢いである⁴⁰。得票率と得票数でも2009年の欧州議会選挙の6%、100万票から、2012年の大統領選挙第1回の17.9%、640万票、2014年の欧州議会選挙の25%、470万票へとなぎ上りとなった（図表5）。大統領選挙第1回の結果で、直近の2007年と12年の間に、サルコジ票の16%、170万票がマリーヌに流れたとみられ、この移動が2012年のオランダ勝利を可能にした。だが左派といえども決して安泰ではなく、マリーヌ票が急進した選挙区では、左派票の伸びがその半以下にとどまった。FNと左派との間で支持者争奪の熾烈な闘いが繰り広げられたのである⁴²。過去30年来、毎年実施されている世論調査で、「FNの主張におおむね同意」が1991年に32%を記したが、それ以降、ずっと20%を切り低迷してきた。ようやく2013年に32%、14年に34%に大幅回復した⁴³。

図表4 FNの党員数（2007～2014）



出典：FN 発表（france tv info avec AFP, le 31 oct. 14）

図表5 FN（国民戦線）の得票率（1994～2014）



出典：Financial Times, 19 May 2014

2) 語彙の偽装

ヨーロッパの各種ウェブサイトには、極右支持とみられる投稿者からの激しい人種差別、アンチセミティズム、イスラム嫌い、ゲイ攻撃の書込みが溢れ、吐き気を催させる人種差別の言説が飛び交っている。マリーヌはこの伝統極右勢力とはきっぱり縁を切りたい。自称「ウルトラ右派」ultra droite たる FN を人種差別主義者と差別化すべく、強固な防波堤の構築に力を注ぐ。その萌芽が、「脱悪魔化」の開始に他ならない⁴⁴。先の市町村議会選挙選の真ただ中、FN のある候補がフェイスブックに、仏海外県出身で黒人のクリスティーヌ・トピラ法相の写真をサルと並べて掲載した。マリーヌは直ちにこの候補を引きずり降ろし、別の候補に差し替えた。

金融危機の勃発後、マリーヌは脱悪魔化戦略を受動的姿勢から積極策へと前進させ、FN の共和派入りを明確なターゲットに据え直した。メディアに対しては、FN の極右呼ばわりへの糾弾を強め、「侮辱には提訴で応える」と脅しをかける⁴⁵。彼女は、「世俗性」(laïcité、非宗教性、政教分離、宗教的中立性)こそが共和派入りを可能にする切り札だと確信している。伝統的カトリックとの断絶を意味するが、それは正当な脱宗教的信念からというより、プラグマティックな選挙戦術とみる方が当たっている。ずっと以前から彼女は冷徹な計算の結果、脱カトリック化が進み政教分離を国

是とするフランスのような国では、伝統的カトリックへの配慮など一票の得にもならない、逆に高いリスクに転化しうる、と読んでいた⁴⁶。

彼女が積極的な世俗性の顕示に踏み切った理由として、以下の3点が挙げられよう。第1に、自らが2度の離婚歴があるシングルマザーであり、やはり離婚した副総裁のルイ・アリオと同棲している。若きフランス女性に普通のプロフィールだが、伝統的カトリックを基盤とするゴルニッシュとの主導権争いのときには、この過去がかえって女性、若者はもちろん、高齢者までも惹きつけた。第2に、イスラムとムスリム（イスラム教徒）を、共和政の基本たる世俗性への脅威として描き出せる。反イスラムと外国人嫌いとの正統化に他ならない。そして第3に、フランス共和政の制度的支柱たる、1905年の政教分離法の擁護を謳うことで、FNは完全な共和派のラベルを獲得できる、である。

FNが世俗性の強化を要求する領域は、とくに公共サービス部門となり、主たるターゲットが学校である。イスラム信徒の生徒・学生による校内でのベール着用を禁止し、給食でのハラール（イスラム作法）による食肉処理の規制を強く求める。イスラム化によるアイデンティティーへの脅威を阻止する、というのが大義名分である。彼女は「世俗性とはわが社会の機能原理であり、それが傷つけばイスラム国家化してしまう⁴⁷」と訴え、世俗性の擁護を「イスラム原理主義」の侵略に抗する最後の砦に仕立て上げようと画策する。マリーヌの世俗性とはそれゆえ、イスラムに対する懲罰的機能なのであり、治安の次元に貶められてしまう。政教分離とは本来、思想信条の自由を保障し、個人の開放を実現する崇高な使命を担う。だがマリーヌが装う世俗性とは、この崇高な使命を拒否する、「世俗性の偽装」でしかない。

FNはカトリック原理主義から遠く離れ、偽装した世俗性擁護へと転向し、正統なる共和派ラベルの獲得を目指すことになった。マリーヌは2002年の大統領選挙で父親の決戦進出を指揮したが、そのとき左右を超えた共和派連合による、反ルペン・キャンペーンの怒涛の展開で父親が引きずり降ろされた事実を決して忘れない。これによるトラウマがFNの共和派入りを誓わせたのだが、その決戦投票の直前に彼女は、いずれ党名変更をしたいとの決意を父親に伝えていた。そもそも共和派政党たる要件とは、共和政（la République、共和制）の正統性を順守し、その諸制度の作動への敬意を示すことにある。法の支配に従う、との含意である。FNには確かに、軍事蜂起や内乱を呼びかけた過去はない。だが個人とは違い政党には、より厳しい条件の遵守が求められ、それが共和派普遍主義の全面的受容である。人間存在とは、何らの前提条件なしに尊重されねばならないが、彼、あるいは彼女は否応なく何らかの共同体に帰属している。それを理由に烙印を押されるとなれば、それは決して許されることではない。これが普遍主義であり、多くの問題をはらみながらも、フランス共和政は大革命以来、共同体の存在を否定する形で普遍主義の原理を守ってきた。1791年には「国家の中に、いかなる共同体もなし」とするルシャブリエ法が成立した⁴⁸。フランスでは民族や宗教への言及は、①平等という共和主義の伝統への背馳、②「国民の一体性」の風化、③ナチスによるユダヤ人迫害への反省、という3つの理由から、かたくなに禁じられている⁴⁹。

だがFNは2重の共同体主義に包囲されており、共和派普遍主義の要件を満たしえない。すなわち第1に、FNはフランス人のアイデンティティーを、白人と「キリスト教の根っ子」を基盤に組

み立てて、ユダヤ人、イスラム、不可知論（認識の限界性を受入れる）、無神論など、他の根っ子からの移入を拒否する。先にみたシャルル・モーラス由来の「真のフランス人」と「擬製のフランス」との断絶である。第2に、最後に権力についての極右、ヴィシー政権からの長い歴史的遺産なのだが、内部の敵を規定して幻想共同体の処罰に走る。極右イデオロギーのキャンパス上に描かれる幻想共同体の主人公とは、かつてはユダヤ人（モーラスは、プロテスタントとフリーメーソン、外国人を加える）であったが、今やムスリムとアラブ人へと替わった。旧極右は、フランス社会の悪のすべてをユダヤ人のせいに帰したが、いまや移民、ムスリム、アラブ人こそが失業、治安の悪化、住宅問題、教育の低下など、諸悪の根源とみなされる。ヴィシーの悪しき遺産は決して清算されていない。

マリーヌが主張する共和政とは、イスラムの神権政治を規制し、宗教活動を協約で縛ろうとする体制以外の何ものでもない。イスラムやムスリムとの戦争状態に矮小化されてしまおう。共和政を活性化する個々人とその行動への寛容と尊敬とが、致命的に欠落している。共和政の貧困化、幻想の共和政といえる。マリーヌがまとう共和政の装いとは、薄くはがれやすく、検証には耐えられない。

さてFNの本性は、外国人嫌いにある。どこの誰ともわからぬ他者によって侵略される、との恐怖心に働きかけ、人々から多様性を剥ぎ取っていく⁵⁰。世俗性という至上命題が突如マリーヌの手持ちの駒に加わったが、はたして彼女の白人とキリスト教、ギリシャ・ローマ文明を起源とするアイデンティティーの主張とは共存可能であろうか。マリーヌは世俗性の擁護を隠れ蓑に、外国人嫌いの本性を隠蔽しようとするに過ぎない⁵¹。自己のアイデンティティーと戦略とを語った著書の中で、彼女は「多文化主義とは、忍び寄るファシズムへの救済役を果すとの口実で、世俗性に対し数多くの違反を犯し、あらゆる逸脱を放置している」⁵²と糾弾する。

他方でマリーヌは、「世俗主義共和派」の仮面をつけて大胆なイデオロギーのスピンオフ（転用）を敢行しようとする。とりわけ女性、ゲイ、ユダヤ人の3共同体に対し、その庇護者を装おうとするのである。彼女はジャンヌ・ダルクの甲冑を纏い、抑圧された少数者の保護者として立ち現われるが、男女やゲイ・ヘテロ、ユダヤ・イスラムの違いを問わず、その変わらぬ立ち位置とはフランス人優先であり、イスラムの犠牲者優先である⁵³。FN綱領はすでに改定されたが、マリーヌは習俗や家族政策に関して大胆な書き換えを進めた。「女性は家庭に帰れ」は明示的には語られなくなり、人工妊娠中絶を解禁したヴェイユ法については、父と違い問題にもしない。また個人の自由擁護の主張が大衆的支持を集めると知って、父親のゲイ嫌いとは決別した。だが党内には超反動の活動家や幹部も少なくなく、ゲイの結婚受容にまでは踏み切れない。PACS（パートナー間の共同生活への優遇措置を認める連帯市民協約）への寛大な姿勢で妥協をはかる。ユダヤ人共同体については、2011年11月、マリーヌはイスラエル国連大使とニューヨークで会見し、その後、イスラエルを訪問した。だがFNの古い世代の指導層には、なお反ユダヤ主義による強力なイデオロギー闘争続行を主張する声が高く、「極右にとっての永遠の敵はユダヤ人だ」との強烈な意識はなお払拭されていない⁵⁴。

FNの脱悪魔化作戦とはこうして、「語彙の偽装作戦」（operation de camouflage lexicale）というこ

とができる。第1に、イスラム概念は、敵に内通する「第5列」の危険性ゆえに、排他的プリズムを通してのみ解釈される。学校給食でのハラール作法に則った食肉処理さえ、国の安全を損なうヒドラだと断定される。それは、目には見えぬがあらゆる場所に遍在するテロリズム供給の源をなし、国際的安全を危険にさらしている。マリーヌはこう糾弾する。第2に、世俗性はひたすらイスラムとの戦闘状態へ貶められ、その概念の矮小化、貧困化が進む。第3に、急進イスラム主義と闘い、世俗性を擁護することを、「フランス・アイデンティティ」や「西洋アイデンティティ」擁護の象徴的闘いに変換してしまう、である⁵⁵。

マリニズムとは、偽装作戦、変装、革命の騙し絵であり、真のイデオロギー的切断とは決していえない。FNを共和派の懐に抱かせるための、正常化、柔軟化にさえなっていない⁵⁶。

3) ヨーロッパ極右運動の指導権争い

新たな欧州議会において、FNは新会派結成をめざした。マリーヌは欧州のナショナル・ポピュリスト運動の主導権をにぎり、大量移民とブリュッセル独裁、ユーロの惨禍を糾弾してメルケルと対決する構えである。前回2009年の欧州議会選挙では得票率6.3%で、マリーヌ、父親、ゴルニッシュの3議席獲得にとどまったが、今回は25%、24議席（その後、移民対応をめぐり1名が離党して現勢23議席）に躍進した。

マリーヌは欧州議員として10年の経歴を重ねるが、かつては極右政党の連合体、「欧州国民運動連盟」(AEMN: Alliance Européenne des Mouvements Nationaux)を通していくつかの党と友好関係は結んだものの、指導権発揮にまでは至らなかった⁵⁷。2010年末に、マリーヌはスウェーデン民主党、「フランドルの利益」(Blaams Belang)、それにオーストラリア自由党(EP6)、イタリアの北部同盟などを糾合して、「欧州自由連合」(AEL: Alliance Européenne pour la Liberté、英表記はEAF)を結成して副総裁に就任した(図表6)。だがこれらの党はジャンマリー・ルペンやゴルニッシュ時代からの古い付き合いの続きであり、ウイングが広がったわけではない。2014年の欧州議会選挙の勝利後に、マリーヌは反イスラム戦略の輸入元であるオランダの自由党(PVV)の加盟を実現した。党首、ヘルト・ヴィルダースは極め付きのイスラエル鼯員であり、これまでジャンマリーとは会見を拒否してきたが、今回、マリーヌとは反移民、反欧州統合で意見が一致した。

図表6 FN, RBM, EAF のエンブレム



欧州議会の公式会派は多くの便宜を享受できるが、その認定条件は、7カ国、25名以上の議員参加である。AEL (EAF)は議員数で37名に達したものの、加盟国の数は5カ国にとどまり、無

所属会派扱いになった。UKIPは、かつてAELに参加したが、デンマーク民主党とともにFNのアンチセミティズムの過去への警戒心を強めた。ファラージュ党首は「娘はFNを過去から遠ざけようと努めるが、歴史の重荷は消えない」と強調して今回、参加を拒否した。かわりにUKIPは、伊の5つ星運動、スウェーデン民主党、リトアニアの秩序正義など7カ国48名で、「欧州自由直接民主」(EEDD: Europe of Freedom and Direct Democracy)の存続・拡充をはかった⁵⁸。他方マリーヌも、ハンガリーのJobbik(ヨビック、よりよきハンガリーのための運動)をアンチセミティズムゆえに、またイギリス国民党(British National Party)を白人限定の入党規定による人種差別ゆえに、それぞれ接触は拒否した。ゴルニツシュはJobbikについて、「たとえ悪魔化を止めずに統制困難な人物が入っているにせよ、信頼できる多くの友らに背を向けるのは残念だ」とコメントした⁵⁹。マリーヌはルーマニア、ブルガリア、スロヴァキア、チェコのなどの「友党」との関係強化に努めている。

ともあれ欧州極右、ナショナル・ポピュリスト運動の結集は極めて困難である。そのグループ化は「スペインの旅籠」(auberge espagnole)に例えられるが、「何も期待できぬタガの緩んだ場所」を意味する。北部同盟は分離主義政党だが、FNは共産党を手本にした「民主集中制」をとるジャコバン組織である⁶⁰。ヴィルダースはゲイの結婚を支持するが、マリーヌはそれと距離を置く。彼らはたとえ結集できても、やがて内紛、対立、分裂が騒々しく繰り返される。継続性は乏しく、ナショナリスト政党はフェデラリスト政党より協調はずっと困難といえる。

結 び

ヨーロッパ経済は、低成長、高失業、膨れ上がった財政赤字、競争力の低下に見舞われ、危機的状況にある。地政学的にもヨーロッパの近隣では、ウクライナ危機やイラク・シリアへの「イスラム国」の侵攻、中東紛争、トルコとロシアの新帝国主義的展開などで、脅威が急拡大している。だがNATOは機能せずに戦略的空虚に陥ってしまい、EUの荷が重くなる。イギリスはスコットランド独立は回避できたものの、2015年5月の総選挙でイギリス本体のEU離脱の危機(Brexit)が迫った。ギリシャでは1月の総選挙で反緊縮のポピュリスト、急進左派連合が勝利して、ギリシャのEU離脱の危機(Grexit)が高まったが、EUとECB、IMFがこれを抑え込む努力を続けている。ユンカー新委員会はEU再生のために、投資基金構想の実現に努め、モーメンタム創出に苦闘している。EUの将来には、多くの障害が待ち構えている⁶¹。

ヨーロッパの緊張が高まる中、フランスでは2017年の大統領選挙と総選挙に向けて、FNのさらなる躍進に懸念が広がっている。だが極右勢力拡大の前には、すでに2015年3月の県議会選挙でも垣間見られたように、少なからぬ限界が立ちほだかる。①党勢の永続性。極右政党に共通して間欠泉の歴史があり、短期間に急増して潮が引く過去を持つ。②高い棄権率。欧州議会選挙では棄権票が56.5%にも上り、これがFNに漁夫の利を得させた。国民の関心が高い大統領選や総選挙では棄権率はぐっと下がる。1995年以降、棄権率は上昇傾向にあるとはいえ、それぞれ15~27%、32~42%に止まった。③全国政党としての基盤の弱さ。先の市町村選挙では、3万7千弱のコミュニケーションのうちわずか600以下しか擁立できていない。弱体化したとはいえ共産党の方が、ずっと大きな

勢力といえる。④マリーヌの傲慢。「私の国民」が口癖であり、離党者の多くが「人を見下し、誰にも敬意を払わない」(カール・ラング元書記長⁶²)と切り捨てる。党员とジャンマリーとの間にあった親密な連帯感は消えてしまった。⑤世俗性、共和派、国民アイデンティティーをめぐる、語彙の偽装・隠蔽。「結集」とは、歴史へのルサンチマン(恨み)による、閉ざされた「共同体」への国民の囲い込みでしかない。国民は分断されてしまう。⑥1980年代以降、欧州ナショナル・ポピュリストの血脈への同化。極右のコード(記号体系)離れが進むが、それに代わるイスラム脅威のヒドラをオランダから輸入し、コード変換に努めるが、拒否反応も強く、限界が露呈する。⑦3年前からプーチンを熱烈支持。マリーヌはウクライナ危機での彼の指導力を絶賛する一方、ヨーロッパはアメリカの飼い犬になったと切り捨てる。2014年には2回モスクワを訪れ、プーチン側近の国会議長と会談した。資金やプロパガンダ技術での支援が期待できようが、国民感情を逆なでしかねない。

最後に、⑧統治能力。FNの個々の政策については、国民の評価が高い。たとえば移民の家族呼寄せ規制(68%で2011年よりプラス24%)、社会扶助と家族手当の国民への限定(67%、+27%)、国境規制の強化(65%、+19%)などへの国民の支持は高い。EU脱退(31%、+14%)、ユーロ脱退(28%、+11%)のように支持が少ない主張もあり、格差は大きい。統治能力については、平均で65%が「無し」と判断している。逆に「有り」とみるものは、左派支持層で16%、右派支持層で54%と大きく分岐し、近接するUMP支持層の間では23%にとどまる⁶³。

フランス政治の焦点は、膨れ上がったFN票を主流派の中道右派が如何にして接収できるかに絞られてこよう。そのカギは、2014年11月にUMP総裁になり、大統領候補の座に近づいたサルコジがどう動くかにある。2012年のサルコジ敗北の主因とされる、UMPのFN化をすすめた、パトリック・ビュイソン主導の「右傾化戦略」が清算できるのか。また「ブルー・マリーヌ連合」に抗して、「国民結集」を取り戻すことができるのか。

他方、社会党のオランダは、失業率が下がらず個人的スキャンダルも暴かれ、第5共和政下で最不人気の大統領に陥落した。2015年1月初めの連続テロ事件で、彼の果敢なテロとの闘いが評価されて人気は急回復したものの、経済の不振が続き、2015年3月には県議会選挙で歴史的敗北を喫した。左翼票のFNによる接収が手痛い打撃となった。

2015年12月には地域圏議会選挙がおこなわれる。4月はじめ、マリーヌの激しい要求を拒み切れず、ジャンマリー・ルペンは最終的にそれへの立候補を断念した。1年前の調査では、ジャンマリーヌの退場を求める声は有権者全体で34%にとどまったが⁶⁴、FN党内では過半数にまで達していた。FNのマリニズム化は確実に進んでいる。

1 *Financial Times*, 26 May 2014.

2 長部(15a).

3 Heisbourg(14).

4 Turchi(14).

- 5 *Le Parisien*, le 31 mars 14.
- 6 *Economist*, 31 May 14.
- 7 *L'Express*, le 29 sept. 14.
- 8 [http://www.francetvinfo.fr/elections/resuetasl ...](http://www.francetvinfo.fr/elections/resuetasl...)
- 9 *Economist*, 31 May 14; francetvinfo, le 27 mai 14, Cinq graphiques pour comprendre le vote des Français aux européennes.
- 10 *Financial Times*, 11 April 14.
- 11 Truong (14).
- 12 Algalarrondo (14a).
- 13 長部 (95), pp. 176–178; 長部 (02).
- 14 Algalarrondo (14b).
- 15 Perrineau (14), p. 79.
- 16 Carnegy (14a).
- 17 *ditto*
- 18 Rassemblement bleu Marine, in *Wikipédia français*.
- 19 Algalarrondo (14b).
- 20 *ditto*
- 21 Rassemblement bleu Marine, in *Wikipédia français*.
- 22 Algalarrondo, (14a).
- 23 Dély (12), p. 39.
- 24 Charles Maurras; Français de souche; Nationalisme intégral in *Wikipédia français*; 内田 (06), pp. 146–149.
- 25 Dély (12), p. 147.
- 26 長部 (02).
- 27 Maharane (14).
- 28 Perrineau (14) pp. 59–63.
- 29 Algalarrondo (14a).
- 30 Perrineau (14), p. 11.
- 31 長部 (02), p. 10; Montvalon (14).
- 32 Guénolé (13), p. 221.
- 33 *Financial Times*, 10 June 14; *Le Monde*, le 10 juin 14.
- 34 Perrineau (14), pp. 73–75.
- 35 長部 (02), p. 17.
- 36 Dély (12), p. 152.
- 37 *ditto*, p. 154.
- 38 長部 (15a).
- 39 *ditto*
- 40 Guénolé (13), p. 222.
- 41 [http://francetvinfo.fr/politique/front-national/le-fn-assure-avoi-m ...](http://francetvinfo.fr/politique/front-national/le-fn-assure-avoi-m...)
- 42 Perrinau (14), p. 34.
- 43 [blog.francetvinfo.fr/sicences-politiques/2014/02/12/sordage-limage ...](http://blog.francetvinfo.fr/sicences-politiques/2014/02/12/sordage-limage...)
- 44 Guénolé (13), p. 223.
- 45 *Le Monde*, le 10 juin 14.
- 46 Dély (12), pp. 168–169.
- 47 *ditto*, p. 170.
- 48 長部 (06), pp. 233–234.
- 49 *ditto*, p. 17.
- 50 Dély (12), p. 174.

- 51 *ditto*, pp. 171–172.
 52 Le Pen, Marine (06), p. 60.
 53 Dély (12), p. 175.
 54 *ditto*, pp. 176–178.
 55 *ditto*, p. 170.
 56 *ditto*, p. 150.
 57 Thierry (14).
 58 長部 (15a), pp. 56–57.
 59 Thierry (14).
 60 長部 (02), pp. 15–16.
 61 長部 (15b, c).
 62 Algalarrondo, (14a).
 63 [http://www.francetvinfo.fr/politique/front-national/le-fin-pas-capalile-de ...](http://www.francetvinfo.fr/politique/front-national/le-fin-pas-capalile-de...)
 64 *Financial Times*, 12 April 15.

参考文献

- 内田樹 (2006) 『私家版・ユダヤ文化論』文春新書
 長部重康 (1995) 『変貌するフランス—ミッテランからシラクへ』中央公論社
 ——— (2002) 「ルペン・ショックとフランス政治」『海外事情』10月号
 ——— (2006) 『現代フランスの病理解剖』山川出版社
 ——— (2007) 「フランス・アイデンティティーの危機—フランス社会モデルと欧州統合をめぐる」『日本 EU 学会年報』第27号
 ——— (2008a) 「サルコジズムの光と影」『公明』9月号
 ——— (2008b) 「ドゴール共和国の終焉—大統領絶対制の見直しと動員政治の脱却に向けて」『日仏政治研究』第3号
 ——— (2010a) 「ヨーロッパの金融危機対応戦略と金融市場の脆弱性」『経済志林』(法政大学経済学部) 77–3
 ——— (2010b) 「サルコジの金融危機戦略」『世界経済評論』3月号
 ——— (2012) 「金融危機後の欧州経済—Europe 2020の課題を睨んで」『金融危機後の欧州経済—Europe 2020の課題を睨んで』国際貿易投資研究所 (ITI)
 ——— (2013a) 「ユーロ危機からの脱出戦略—OMT と『EU ニューディール』」『経済志林』80–3
 ——— (2013b) 「オランダ政権の誕生とフランスの競争力低下—『フランス的例外』からの復讐」『日仏政治研究』第7号
 ——— (2014) 「ユーロ危機と EU の将来—発生、深化・拡大、救出」『日本 EU 学会年報』第34号
 ——— (2015a) 「州議会選挙と欧州ナショナル・ポピュリズムの躍進」『経済論纂』(中央大学経済学部)
 ——— (2015b) 「最大のリスクは欧州政治—地政学回帰の年、2015年」『公明』4月号
 ——— (2015c) 「ユンカー欧州委員長の下、成長を目指すヨーロッパ」『国際貿易投資研究所ウェブサイト』<http://www.iti.or.jp/report/05pdf>
 長部他 (2014) 『現代ヨーロッパ経済 第4版』有斐閣アルマ
 Algalarrondo, Herve (2014a), La vraie nature de Marine Le Pen, in *Nouvel Observateur*, le 8 mai.
 ——— (2014b), Et maintenant, objectif Élysée, in *Nouvel Observateur*, le 29 mai.
 Carnegy, Hugh (2014a), New Frontiers, in *Financial Times*, 19 May.
 ——— (2014b), Sarkozy investigation clouds decision on return to politics, in *Financial Times*, 2 July.
 Dély, Renaud (2012), *La droite brune*.

Guénolé, Thomas (2013), *Nicolas Sarkozy, chronique d'un retour impossible ?*

Heisbourg, François (2014), Holland's dubbing is not a blank cheque for the right, in *Financial Times*, 1 April 2014.

Lemarié, Alexandre (2014), Patrick Buisson, ancien favori de Sarkozy devenu pestiféré, in *Le Monde*, le 6 mars.

Le Pen, Marine (2006), *À contre flots*.

Maharane, Saïd (2014), Le vrais gars de la Marine, in *Le Point*, le 29 mai.

Montvalon, Jean-Baptiste de (2014), Face à la Marée FN, in *Le Monde*, le 14 sept.

Perrineau, Pascal (2014), *La France au Front*.

Thierry, Maël (2014), En recherche amis étrangères, in *Le Nouvel Observateur*, le 8 mai 14.

Truong, Nicolas (2014), Le débat intellectuel français enferré dans la querelle de l'identité, in *Le Monde*, le 30 avril.

Turchi, Marine, « La frontière des électors UMP et FN n'est plus étanche » [archive], *Mediapart.fr*, le 12 avril 2014 (consulté le 12 avril 2014).